

はじめに

暮らしている姿全体が風景

今、近江八幡市、特に水郷周辺の自然や八幡堀を中心とした伝統的建造物群保存地区の町なみを訪れる観光客が右肩上がりに増えています。

それはなぜなのか。観光ボランティアガイドの方の話によると、近江八幡の伝統的な落ち着いた町なみを体感すると、癒し、質実剛健・質素儉約、コミュニティーの良さ、美しさ、開放感などを感じるそうです。セットとして造られたテーマパーク的なものではなく、日々の営みがある本物のまちの風景の魅力に感動しているということです。

私達が大事にしなければならないことは、伝統文化を継承し、まちの中で人々が誇りをもち暮らしている姿(文化的景観)そのものではないでしょうか。

100年先のまちのあるべき風景づくり

ところで、約35年前に始まった八幡堀の修景保存運動の目的は、八幡堀とともに引き継がれてきた歴史・伝統文化の継承と、アイデンティティの源泉づくりがありました。

もし、八幡堀が埋められていたら今日どのようなまちになっていたかと考えるとき、時代時代のまちづくりの中で、流行にはやされることなく、50年100年先のまちのあるべき姿を見据えたまちづくりが如何に重要であるかを考えさせられます。

市民一人ひとりの熱い思いが主体

このようなことから、本市の風景への取り組みは、単にまちの外観をよくする事業ではなく、自然や伝統文化の継承を本質的な目的としなければならないことがわかります。そしてその取り組みは、地域の個性を活かし地域の魅力と価値を高めることであり、その活動自体が地域への限りない愛着と誇りを生み出すことにつながります。風景を良くするまちづくりが400年間栄えた知的再生産のまち近江八幡として再生していく予感さえしてきます。

次世代のために環境と風景の共存

自然環境の再生やエネルギーの創出などの環境への取り組みは、これから時代に欠かすことの出来ないものとなってきています。風景づくりは、伝統的な風景を死守するということではなく、近江八幡の風土である「進取の気象」の精神をもって、新しい時代の流れを取り入れていくことも必要です。

次世代のために、環境への取り組みを妨げることなく伝統的な風景を活かしていきます。

風景づくりは市民の熱い思いが主体であります。市民のみなさんが共に考え、素晴らしい風景を守り、はぐくみ、次世代へつなげていきましょう。

